

第21回大会後5年が経過—静寂（しじま）の支配するキャンパスからの回顧

浅川満彦（酪農学園大学獣医学群）

新型コロナウイルス感染症アウトブレイクの影響で、2020年度の第26回目となる日本野生動物医学学会大会が中止となり、仕方がないとは頭では理解しつつも、学会員の多く（特に、本学会の屋台骨とも言える学生部会の皆さん）が落胆しているものと想像される。が、著者と著者が運営するゼミ（野生動物医学センター WAMC 兼寄生虫病学ユニット。なお、現在、医動物学ユニットへの改名検討中）所属の5、6年生計9名にとっては、より深刻である。なぜなら教育運営上の障害となるからだ。本ユニット・ゼミ生は大会発表が義務付けられており、毎年黄金週間はこの大会事務局へ送る講演要旨作成で呻吟している。就中、6年生はこれを契機に、卒論（可能ならば投稿原稿）を一気呵成に終わらせ、後顧に憂いなく国試対策に雪崩れ込む。このリズムが大きく崩れた。しかし、ご存じのように、このウイルスはコウモリ類やセンザンコウなどの野生動物を起源と報道されているので（図1）、もし、これが真ならば野生動物医学というサイエンスの重要性が、全世界にあらためて強く印象付ける好機と、むしろ前向きに考えたい。

ところで、いまや学生部会の学生諸君の多くはご存知無いであろうが、5年前の大会は旭山動物園・坂東 元園長を大会長に、彼の母校・酪農学園大学で盛大に開催された（浅川，2015）。著

者が大会事務局長であったことから、当時ゼミ生は、自身発表に加え、学生部会酪農大支部ルウエ（顧問が著者。現在、公認サークル申請中）とともに大会運営にも力を注いだ。当時の学生たちは、いずれも、現在、園館・エキゾ獣医師を含む社会人や大学院生として大活躍し、時々、別の学会・研究会で顔を合わせている。なお、その大会ポスターや講演要旨集表紙であるが、当時、旭山動物園でカバが特に注目されていたことから、その動物に因むことに決定された。そこで、現在、東京在住の漫画家である浅山わかび氏の作品の1つに、これに合致するものがあったので、許可を得て、使用させて頂いた（図2左）。その後も、浅山氏の作品にはお世話になり、たとえば、同時期に描いた古地図とナメクジの画は著者と WAMC ゼミ生による書評集の表紙にも使用された（図2右；本書評集は学生部会各支部に送付中）。



図1 新型コロナウイルスの二次的な保有者と見なされたセンザンコウ。北海道遠軽家庭学校から WAMC に寄贈された本剥製



図2 漫画家・浅山わかび氏が高校時代に描いた作品が使用された第21回日本野生動物医学学会大会ポスター（左）と WAMC 書評集表紙（右）

江別大会の頃から最近まで、浅山氏はプロの漫画家ではなかったが（というか、油絵を目指すかどうか迷っていた）、今般の2020年大会中止決定前後に、彼女のデビュー作が相次ぎ刊行された（図3）。週刊少年サンデー（小学館）連載の全17話から成る単行本で、『洗脳執事』とは何やら穏やかではないが、しっかりと練られたストーリー展開と丁寧な画は魅力的である（註：主



図3 『洗脳執事』(小学館)第1巻(左)と第2巻(右)表紙

人公の友、ベニコンゴウインコは鳥好き必見)。学生諸君や若い社会人は、必ず人間関係で拘泥するが、そのような際、間違いなく何らかのヒントを得るはずだ。コロナ禍は彼女の出鼻を挫くようであるが、外出自粛要請により、この無名作家の小品を熟読する素地を醸成したとはならないか。人間万事塞翁が馬、繰り返すが、マイナス面のみならず、微かな光を見つける努力だけは失いたくはない。

引用文献

浅川満彦. 2015. 第21回日本野生動物医学会大会(江別大会)開催報告. *Zoo and Wildlife News* (日本野生動物医学会ニュースレター) (41): 1-4.